

I 検討課題と協議経過

1 検討すべき課題と検討の視点について

千葉県教育委員会は、令和4年3月に、今後10年間の県立高校改革に関する基本的な考え方を示す「県立高校改革推進プラン」を策定し、生徒の多様なニーズへの対応や、キャリア教育・職業教育の充実など、県立高等学校の現状と課題を踏まえ、「全ての高校の魅力化と学びの改革」「キャリア教育と職業教育の充実」「学校間連携」「戦略的な広報」の4点を重点事項として、県立高校の魅力化・特色化を推進することとしました。

本プランでは、県立高校の現状と課題の1つとして、人口の減少を掲げ、都市部と郡部の差について、次のように述べています。

中学校卒業者数は、平成元年以降、全県的に急激に減少してきましたが、令和4年3月から10年後の令和14年3月には、さらに約6,200人減少することが見込まれています。

特に、第1学区から第3学区までの、いわゆる都市部においても、10年後には約3,000人が減少する見込みとなっています。

また、第4学区から第9学区までの、いわゆる郡部においては、少子化に伴う小規模化が進行するとともに、これまでの再編により、高校が離れて点在している状況にあり、交通の利便性や学校選択の幅において、都市部との差が拡大しています。

千葉県は地域特性が非常に多様であり、まさに「日本の縮図」といえる状況にあります。人口減少が進む県内各地域において、人口減少が教育の地盤沈下を引き起こさないよう、少子化や地域の状況、私立学校も含めた高校の設置状況等を踏まえた高校の適正配置の在り方について検討する必要があります。

このような状況を踏まえ、それぞれの地域の特性を踏まえた高校の在り方について検討する必要があることから、中学校卒業者数が減少する中でも、教育課程の柔軟な編成や活力ある教育活動が展開できるように、県立高校の学校規模の適正化を図り、併せて学校及び学科の適正な配置を行うこととし、県立高校の配置について、具体計画の方向を次のように定めました。

○多くの友人・教職員との触れ合いや切磋琢磨の機会を確保し、教育課程の柔軟な編成や活力ある教育活動が展開できるよう、学校の規模・配置の適正化を推進します。

- 都市部では、1校当たりの適正規模を原則1学年6～8学級とし、適正規模に満たない学校や同じタイプの学校が近接している場合については、統合による多様な学びへの変換や新たなタイプの学校への再編を検討します。
- 郡部では、1校当たりの適正規模を原則1学年4～8学級とし、適正規模に満たない学校については統合の対象として検討しますが、学校・地域の状況等に配慮し、統合しない場合もあります。
- 中学校卒業生数が減少する中、活力ある教育活動を維持するため、適正規模・適正配置の観点から、10組程度の統合を見込んでいますが、学校の適正な配置に当たっては、地域における学校の在り方などについて、生徒や保護者のニーズを踏まえるとともに、学識経験者、地域関係者、私学関係者、教育関係者から成る地域協議会などにおいても意見を伺いながら、検討を進めます。
- 多様なタイプの学校の中から、生徒が興味・関心や進路希望に応じて、自分に合った学校が選べるよう、適正配置に配慮します。
- 定時制高校については、学びの機会を保障するとともに、生徒・保護者及び地域のニーズ、地域バランス等を考慮し、配置の在り方について検討します。
- 通信制高校については、県内唯一の通信制高校である千葉大宮高校を中心に、県内全域の生徒が学ぶことができる体制づくりを検討します。

これらの具体計画の方向に基づいた学校の適正な配置を検討するに当たり、地域関係者の意見を聴くために学識経験者、地域関係者、私学関係者、教育関係者から成る地域協議会を、今後は郡部だけでなく都市部においても同様に中学校卒業生数の減少が見込まれることから、県内全域を対象に設置することとしました。

地域協議会では、学校の適正配置はもとより、地域の特性や実状を踏まえ、「将来の子どもたちにとって、この地域の高校がどうあるべきか」、「どのような学びがこの地域の子どもたちに必要か」など幅広い視点からさまざまな意見を聴取することを目的としました。

また、「千葉県教育振興基本計画」や「県立高校改革推進プラン」を踏まえ、「地域における県立高校の在り方」、「地域との連携」をキーワードとして、それぞれ具体的に次の点を検討の視点として、議論を深めることとしました。

- ・「地域における県立高校の在り方」では、地域の産業を支える人材を輩出し、担い手育成の拠点となる学校、多様な生徒のニーズに応え、様々な機能を備え地域に貢献する学校について

- ・「地域との連携」では、企業等の地域の教育力の一層の活用、地域活性化への貢献、市町村や地域との連携・協働等について

以上の検討の視点のもと、令和5年度山武地区において地域協議会を設置し、3回の協議を重ねたうえ、本報告として取りまとめました。

なお、山武地区における高校の状況ですが、県立高校は全日制6校（うち1校は定時制を併置）、私立高校は全日制2校が所在^{※1}しています。学校規模^{※2}は、県立高校全日制6校では、令和5年度入学生の学級数合計が25学級、平均学級数が4.2学級であり、定時制高校1校の学級数は同年度入学生で1学級でした。県立高校定員に対する充足率^{※3}は、令和5年度入学生において、全日制では九十九里高校39%、東金高校の定時制15%で入学生定員の半数を下回りました。

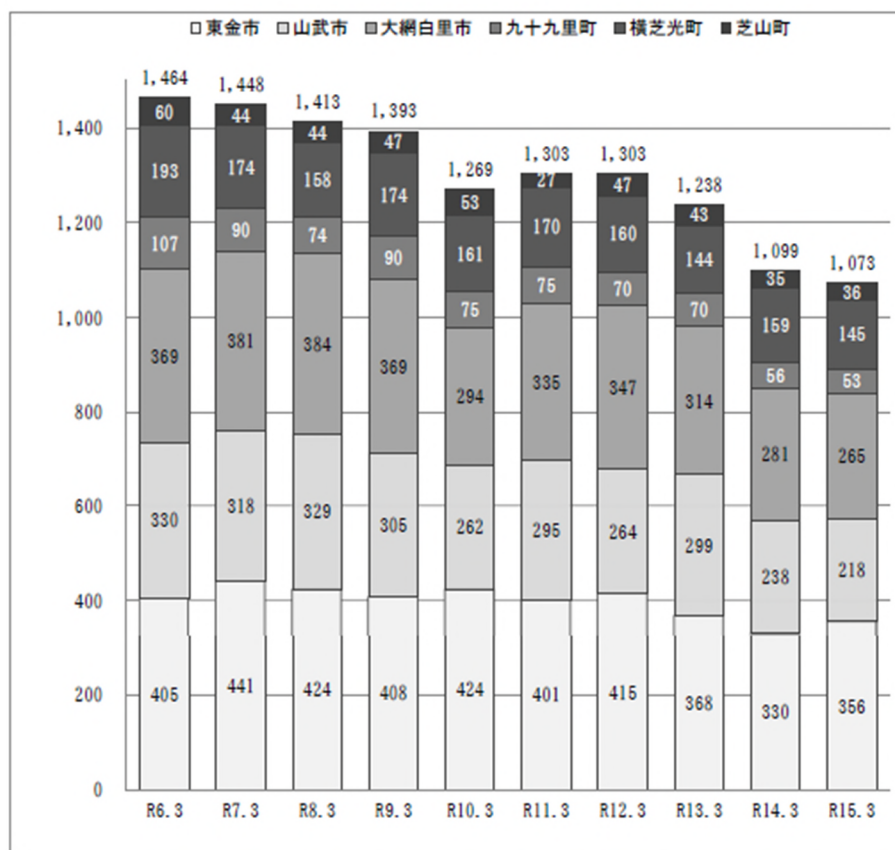
一方、山武地区の中学生の状況^{※4}は、令和4年3月卒業者数は1,540名でしたが、10年後は推計で1,099名となり、令和4年3月卒業者数と比較して441名減少します。このような県立高校の学級規模や中学卒業者数の減少傾向から、10年後の学校規模は県が示す適正規模の維持が危惧される状況にあります。

※1 山武地区の県立高校の所在については、資料編「資料1 会議資料」9ページを参照。

※2 山武地区の県立高校の学校規模については、資料編「資料1 会議資料」19ページを参照。

※3 山武地区の県立高校の充足率については、資料編「資料1 会議資料」20ページを参照。

※4 山武地区の中学校卒業者数の状況については、資料編「資料1 会議資料」21～25ページを参照。



山武地区の国公立中学校卒業者数の推移と見通し

2 協議の経過について

第1回

令和5年7月26日（水）開催 （於：城西国際大学 本部棟8階会議室）

○ 座長選出

【議題】

- 1 地域協議会設置の趣旨
- 2 「県立高校改革推進プラン」及び「第1次実施プログラム」について
- 3 山武地区の県立高校の現状と課題

第2回

令和5年8月28日（月）開催 （於：城西国際大学 本部棟8階会議室）

【議題】

- 1 県立学校改革推進プランに基づく高校再編について
 - ・単位制の導入（成東高校）
 - ・グローバル化に関する学びの導入（松尾高校）
 - ・農業に関する学科の学科再構成（大網高校）
 - ・再編対象校に係る成果と課題

第3回

令和5年9月19日（火）開催 （於：城西国際大学 本部棟8階会議室）

【議題】

- 1 山武地区の県立高校の適正規模・適正配置について
 - ・望ましい学校規模について
 - ・地域との連携及び地域からの支援について
 - ・地域連携協働校について

Ⅱ 協議結果

1 地域協議会開催の趣旨

地域協議会開催の趣旨及び協議スケジュールを説明しました。

※ 詳細は、資料編「資料1 会議資料」

3 ページ（山武地区地域協議会設置要綱）を参照。



2 「県立高校改革推進プラン」及び「第1次実施プログラム」について

次の点について説明しました。

- ・これまでの高校再編について
- ・「県立高校改革推進プラン」の概要
- ・「第1次実施プログラム」の概要

※ 詳細は、資料編「資料1 会議資料4～7ページ」を参照。

3 山武地区の県立高校の現状と課題

山武地区の県立高校の現状と課題として次のような内容を説明しました。

（1）山武地区の県立高校6校の現状

- ・概要、沿革、募集学級数の推移、入試の状況、進路の状況について確認する。
- ・山武地区には、普通、理数、国際教養、農業（農業・食品科学・生物工学）、商業（商業・情報処理）といった様々な学科があり、中学生には学びの選択が幅広くできる地区である。
- ・松尾高校は平成18年に共学化するとともに、福祉コースを設置し、大学や専門学校、地域関係施設等との連携により、福祉系人材を育成している。また、平成28年にはグローバルに関する学びを導入し、言語の習得だけでなく、自国の伝統や文化についての理解を深めるとともに、異文化理解の力を身につけるため、特色ある学びに取り組んでいる。
- ・成東高校は、平成28年度に単位制を導入、令和6年度は普通科に教員基礎コースを設置し、大学や近隣の小中学校との連携により、教育に携わる人材を育成している。
- ・東金高校は、平成8年に国際教養科を設置し、国際人として必要となる知識や技術等を身に付けるための学びを提供している。
- ・東金商業高校は、商業に関する高度資格の取得を目指した教育を提供するとともに、社会人として必要とされる資質や素養を身に付けるための学びを

行っている。

- ・大網高校は、県内農業高校において食品・生物工学の中心校であり、平成 30 年度には、生産技術科と農業経済科を農業科、食品工業科を食品科学科に学科再構成し、中学生が理解しやすい学科名とした。
- ・九十九里高校は、平成 16 年にビジネス基礎コースと生活デザインコースを設置し、ビジネスだけでなく、社会人としての資質や素養を身に付けるための特色ある学びを提供している。
- ・東金高校には定時制の課程が設置されており、地域の学びのニーズに応じている。

※ 詳細は、資料編「資料 1 会議資料」10～18 ページ（基礎資料）を参照。

（２）募集学級数の推移

- ・平成元年には松尾高校、成東高校、東金高校、東金商業高校、山武農業高校、白里高校、九十九里高校の 7 校合わせて全日制合計で 51 学級あったが、全県的な生徒数の減少を受け、募集学級数を減じるとともに再編統合を行い、現在では 6 校（大網高校は山武農業と白里高校の統合校）合わせて 25 学級となっている。
- ・令和 5 年度入試においては、松尾高校の普通科、成東高校の理数科、東金商業の商業科・情報処理科、大網高校の農業科、食品科学科、生物工学科、九十九里高校の普通科で定員未充足であり、全日制 5 校において合計 149 名分の未充足であった。

※ 詳細は、資料編「資料 1 会議資料」19 ページ（基礎資料）を参照。

（３）山武地区の中学校卒業生の現状と今後の見通し

- ・平成 25 年 3 月に 2,035 名だった中学校卒業生数は、令和 4 年 3 月には 1,540 名と、10 年間で約 495 名減少している。減少傾向は今後も続き、10 年後には 1,099 名程度まで減少すると見込まれている。
- ・学区内の県立高校全日制へ進学する割合は約 65%であり、公立高校進学者の約 55%が学区内の県立高校 6 校を選んでいる。その一方で、学区内の中学校卒業生数の約 4 分の 1 が私立高校へ進学している。
- ・学区内の県立高校 6 校に進学する割合が現状と同程度のまま推移していくと仮定すると、10 年後に学区内の県立高校 6 校に進む数は約 715 人である。
この数は 40 人学級に換算すると 18 クラス程度である。

※ 詳細は、資料編「資料 1 会議資料」21 ページ（基礎資料）を参照。

＜第6学区の県立高校について＞ 計6校 26学級 () R5学級数

○普通科(18)・・・松尾(3)、成東(6)、東金(4)、大網(1)、九十九里(3)、東金定(1)

○普通系専門学科(2)・・・成東(1)、東金(1)

○職業系専門学科(6)・・・東金商業(3)、大網(3)

【令和5年度現在】

4 山武地区の県立高校の在り方について

協議会委員からは次のような意見が出されました。

○教委会委員の意見

【普通科及び普通系専門学科・コース】

- ・成東高校は、多くの科目が選択できるなど、単位制の特徴が活かされている。地域にそのような学校があることは安心である。
- ・成東高校の課題は、理数科の定員割れである。本来の理数科の機能が果たされていない状況にあり、地域の拠点校としての地位が脅かされている。
- ・成東高校については、くくり募集等、様々な改革を行っていることから、その成果も踏まえ、動向を注視する必要がある。
- ・長期休業中に集中的に講義を受けなければならない「コース」は、生徒にとって本当に魅力的なのか。生徒の負担になるのではないか。
- ・「教員基礎コース」を受講した生徒は、様々なターンにより地元に戻ってくることができる。大人である我々が地域づくりから考えていく必要がある。



【職業系専門学科・コース】

- ・大学進学するのであれば、普通科でよいのではないか。商業高校は資格取得により、実力のある人材を地域産業に輩出していく印象であった。
- ・高等学校を含めた地域の学校と連携しながら、街づくりを進めていきたい。
- ・生徒が地域の課題を理解し、課題解決に向け取り組むとともに、改善策を地域に提案し、発信していく。その中で、生徒が地域の魅力を整理していくなどの取組が増えている。



- ・自分と同じような性格（服飾関係に興味がある等）の生徒が集まるであろうということに安心してその高校を希望する生徒が多い。子ども達の感覚は那样的なところである。

【社会のニーズに対応した教育】

- ・今後の県立高校の在り方を考えるうえで、日本と違うバックグラウンドを持つ家庭の生徒への対応を検討する必要があるのではないかと考える。様々な対応や支援が必要になると考える。
- ・現在の高校の学びでは、最近の社会情勢や将来に基づいた学びが行われていると感じている。高校全体の学び自体が変わってきていると理解している。
- ・地域に所在する様々な教育機関を有効活用することが、転入者増加の鍵となるのではないかと考える。
- ・40人学級でのクラス経営が困難になっているのではないかと考える。
- ・子ども達は大人とは違う考えを持ち、自分の好きなスポーツに取り組むために通信制高校に行きたいといった明確な意志を持っている子もいる。こういった子どもたちの多様なニーズに応えられるものができれば良いと感じる。

【全体を通して】

- ・我々の学区に魅力ある高校を作っていただき、都市部から郡部へ呼び込んでいただけるような、魅力的な高校づくりをお願いしたい。
- ・卒業した公立高校の名前が一種のステータスとなる時代は終わった。その高校で誰に何を学ぶかということに魅力を感じる世代に移っている。
- ・今後、日本は少ない人数で頑張っていかなければならない。一人一人を大切に、丁寧に、生徒たちの資質を伸ばしてあげられるような環境が高校で必要である。
- ・生徒が安心して通学できる通学路、保護者も安心して通学させられる環境づくりに取り組むことが地域の役目であると考えます。
- ・何かに特化する事で生計を立てられるような、生きていく力を身に付けられるクラスがあってもよい。とにかく、生きていてくれればよい。楽しんで高校生活を送って欲しいという思いである。
- ・通学の問題や時間が限られて仕方がないということではなく、自分が時間を選んでいくといったベクトルを逆転させたところに、新しい教育の意義や価値が光ってくる気がしている。
- ・少子化はチャンスである。子に寄り添うような指導やそれを提供できる場など、多様な場を与えてあげることが大切である。

5 山武地区の県立高校の適正規模・適正配置について

【望ましい学校規模について】

- ・地域の私立高校の現状を踏まえると、6～7学級を減じる必要がある。そうしないとバランスが取れない状況である。
- ・部活動等も含め、健全な高校生活が行われるためには、1学年6～8学級が理想と考える。
- ・山武市、東金市、大網白里市に公立高校が1校ずつ所在するのが理想ではないか。
- ・複数の学校を1校にまとめると、コストや教員不足解消等、メリットが大きい。
- ・普通科、専門学科といった機能を1校に集約することで、それらの機能をより充実できるのではないか。
- ・小規模校がいくつもあるより、他の地域からも生徒が集まるような、ある一定の規模を有する学校があってもよい。

【地域との連携及び地域からの支援について】

- ・街から高校生の姿がなくなると大変なことになる。そうならないように我々も知恵を出さなければならない。
- ・高校を残していく方向で考えることが街づくりの軸となる。

【地域連携協働校について】

- ・適正規模に満たない県立高校の経営手段として導入するには、慎重な検討が必要であると考ええる。

【全体を通して】

- ・小手先で学校の存続を考えるのではなく、将来的に地域にどのような教育が必要か、公立高校の教育はどうしたら良いのかという視点も必要である。
- ・統合も一つの選択肢ではあるが、何かに特化（英語教育など）して存続することも一つの道ではないかと考える。必ずしも定員が多くなくてもよい。高校卒業後の道のりを築き、未来へ繋げることもこれからの大きな柱となると考える。

Ⅲ 今後の検討に向けて

山武地区には、県立高校6校が所在し、その学科構成は、普通、理数、国際教養、農業（農業・食品科学・生物工学）、商業（商業・情報処理）といった様々な学科があり、普通科と職業系学科がバランスよく設置されていますが、工業や水産など職業系学科は設置されていません。中学生の状況は、令和4年3月の卒業生数は1,540名であり、10年後には441名の減少が見込まれています。山武地区は、県中央部に位置し、肥沃な九十九里平野と北西部の丘陵からなり、東金市、山武市、大網白里市、九十九里町、横芝光町、芝山町の3市3町で構成されています。産業面では、野菜や米、畜産のほか、山武杉と呼ばれる高級な杉材の生産なども行われており、九十九里沿岸での漁業もさかんです。

このような特色を支え、更に強い地域を作る高校について、協議会委員は生徒減少による高校再編を地元の切実な問題としてとらえ、お互いの立場を越え、熱心に議論していただきました。意見を集約すると次のとおりです。

- 特色や魅力のあるコース等の周知の必要性
- 山武地区の教育財産の活用方法
- 卒業後の雇用受入を見据えた地域の環境整備
- 中学校の進路指導における選択肢の提示の仕方の再考
- 山武地区における小中学校の統合状況と統合によるメリット
- 国の基準にあてはめない特例の検討
- 地域連携協働校のメリット
- 35人学級の導入や地区外からの生徒の獲得など、高校を残すための方策
- 地元市町から県立高校に通う生徒に対しての支援

協議会委員の意見を踏まえ、

今後の山武地区における高校の在り方については、以下の要素に留意し、更に検討を進める必要があると考えます。

- ◎山武地区の特色を支えるため、地域に残り地元を大切にする心を育成する教育を展開する高校
- ◎小・中学校、大学、関係機関、住民の方々など地域の教育力を学校教育に取り込み、地域に愛され、地域とともに歩む高校
- ◎生徒減少期ではあるが、生徒がお互いに切磋琢磨し、学校の活力を失わないために適正な学校規模が維持されている高校

最後に協議会委員の皆様には、それぞれの立場から多岐にわたる貴重な意見を頂きましたことに感謝申し上げます。皆様の意見をもとに山武地区の子どもにとって、より活力のある魅力ある学校づくりを今後も進めてまいります。